

郷土芸能の観光資源化と課題

－広島県北広島町の神楽を例に－

広島修道大学非常勤講師 高崎義幸

1 目的

本報告の目的は、自治体等が郷土芸能を観光資源化する際の課題について検討することである。中山間地域などの条件不利地では、地域活性化の手段として郷土芸能の観光資源化を推進する自治体が少なくない。しかし民俗が、「商品」として加工され、芸質が変化することや行政に利用されることに批判的な住民も少なくない。それゆえ郷土芸能を観光資源化したり、地域振興に利用したりする場合、担い手の意向や伝承活動に配慮した事業のあり方を考えなければならない。集客や経済効果も重要であるが、担い手の実情や民俗芸能に対する思いを把握することも重要であると考えられる。

2 方法

そこで、神楽が盛んな中山間地域の自治体である広島県山県郡北広島町を事例として、北広島町神楽協議会に加盟する神楽団を対象に、神楽団の現況と地域振興を目的とした神楽の観光資源化の意向を探るための量的調査を実施した。

3 結果

分析の結果、北広島町神楽団の現況および観光資源化の課題は次のように整理できる。

- 1) 団員の高齢化や新規入団者の減少による人員不足や仕事等のやりくりで練習や上演活動に支障がある。
- 2) 出演回数が多い神楽団は、年間約50回の上演をこなすなど負担が大きい反面、ほとんど上演機会のない神楽団も少なくない。
- 3) 神楽が観光資源化されることで、神楽の伝統的形態の崩壊や「あるべき姿」「本質」の喪失を危惧する団体も少なくない。
- 4) 地域振興を目的とした神楽の観光資源化を進める場合、神楽団・住民・団員の勤務先・他の民俗芸能等との間の合意形成が必要となる。

4 結論

芸北神楽は地域の人びとにとって、生活の場に根づいた大切なシンボルであり、生きがいであり、コミュニケーションのためのツールでもある。それが、現代社会において「広島神楽」として構築され、観光資源としての価値を付与され、地域振興に利用されるとき、異なる立場にある主体間でコンフリクトが生じている。したがって、神楽の観光資源化と地域振興を考える場合、観光客の意向や経済効果も重要であるが、地域住民や神楽団の思いや活動方針に寄り添うものでなければならず、そのための合意形成と支援が必要である。

文献

- 三村泰臣, 2004, 『広島神楽探訪』南々社。
森田真也, 2003, 「フォークロリズムとツーリズムー民俗学における観光研究ー」『日本民俗学』263: 92-102。
米田雄介, 2001, 「神楽の変容とその社会的基盤に関する研究」平成12年度県立大学重点研究事業研究成果報告書。